

---

# 正義の味方の妹は生徒会長

疾風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正義の味方の妹は生徒会長

### 【Nコード】

N4959Y

### 【作者名】

疾風

### 【あらすじ】

ある日の幻想郷。

正義の見方であるチルノの妹、シルビア。そしてそのパートナーの射命丸文。二人は神からの依頼で他の世界に行くことになるが、早くもトラブル発生！？シルビアと文は別れ離れに……！そしてシルビアが転移した先にあつたのは……？

誤字、脱字、ご都合主義などがあります。原作設定を壊してしまう可能性があるのです、嫌な人は読まないことをオススメします。

## 第一話 依頼（前書き）

あらずじ、キーワードでも注意しましたが、もう一度確認させてください。

これは、作者の妄想で出来上がっています。設定に変な部分があったり、原作設定を無視してしまったたりしている可能性があります。それでもよろしければ、読んでください。

## 第一話 依頼

ここは幻想郷、魔光によって暮らしている世界だ。

そこに、四人の少女がいる。

一人は正義の味方で有名である元ソルジャー、チルノ。そしてそのパートナーでこれまた元ソルジャーである、レイセン・ウドンゲイン。

さらに、正義の見方の妹で元ソルジャー、シルビアと元新聞記者である射命丸文。

この四人は二組に別れ何でも屋を営んでいる。主な組み合わせはチルノとレイセン、シルビアと文という組み合わせだ。

そして、シルビアと文の方にある依頼が来ていた。

その依頼は、森羅の社長・八雲紫からだった。

そんな珍しい人からの依頼に、二人は戸惑いながら、内容を聞きに紫の下に訪れていた。

「なんですか、社長」

「ああ、来たのね。じゃあ早速依頼の内容を話すわ」

シルビアと文は社長室に入り紫に声をかけ、紫はくるりと椅子を回し二人に向き合い依頼の内容を話し出す。

その内容を、二人はとても細かい所から全て聞かされた。

依頼の元はとある神様で、自分が管理している世界に上司、つまりは自分より位が高い神様の事なのだが、その上司により自分とその世界の人間では対処しきれない事態が発生した。この事態はまだ数年は大丈夫だが、数年もすれば本当に対処できなくなってしまう。そこでその神様は人外と人間が共存する世界、幻想郷に、そしてそこを作った八雲紫に助けを求めたらしい。

そしてその依頼内容を聞いた二人はベタな展開だなと思っていた。

二人は最後に、チルノたちと依頼をやらしてくれと言った後、森羅の建物を後にした。

「はあ！？ 依頼で他の世界に行くう！？」

「っ、姉さん五月蠅い！」

森羅の建物がある町外れの荒野、シルビアと文、そしてチルノとレイセンは四人でやる最後　はしばらくの別れになる為　のモンスター退治に来ていた。

「他の世界って……大丈夫なの？」

「ええ。依頼の内容はよくヒーロー小説にあるような話だったし、何とかなるわよ。きっと」

「そうはいつでも……っ！」

「！　どうやら、この話は後になるみたいね……シルビア、チルノ！」

レイセンと文は先行し、歩きながら話していると、依頼対象であるモンスターを発見した。

レイセンは愛用の銃を出して警戒し、文はシルビアとチルノを呼んだ。

シルビアとチルノは文の方に目を向け、モンスターを視界に入れた後、自分が持っている武器を手にした。

四人はアイコンタクトをした後、頷きあう。そして、シルビアとチルノが飛び出した。

先手を打ったのは、チルノだった。チルノ達に気づいたモンスターが振り向く前に、チルノは自分の剣を命いっぱい振り下ろした。チルノの剣は頑丈で、斬るというよりも砕くといった方があって

いる。そしてチルノ自身の力も入っている為、弱いモンスターなら、これだけで終わる。強いモンスターだとしてもそれなりのダメージが与えられる。

だが、このモンスターはダメージを受けた様子もなく。ケロッとしていた。

次のシルビアの攻撃を受けても、さつきと様子は変わらない。

シルビアの刀は、チルノの剣とは逆で切れ味に特化した刀だ。

切れない物など少ししかない位の切れ味だ。そして、とても頑丈である。

チルノの剣に比べれば劣るが、ゴーレムを斬ってもひびすら入らなかった刀なのだ。

その、どのモンスターを斬ってもひびすら入らなかった刀が、このモンスターを一回斬っただけでひびが入ってしまった。それは、このモンスターの頑丈さを物語っていた。

現に、後ろから文とレイセンが弾幕と弾丸で援護しているが、それすらもはじき返してしまい、チルノの連撃にもびくともせず、新しく出したシルビアのナイフまで折ってしまっていた。

「ちょっと、なんなのよこいつ。全然攻撃が聞いてないじゃない！」

「そ、そんなのあたいが知る訳ないだろう!？」

「うるさい! 口より手を動かさない!!」

「そういう事よ。痴話喧嘩なんてしてないの」

チルノとレイセンが喧嘩を始めそうになったのを文とシルビアが止める。シルビアは二人にちょっかいをだしながらだが。

その言葉を聞いた二人は顔を赤くして反論するが、すぐにモンスターに向かった。

「姉さん!」

「おう! ……ブレイク!!」

「エンゲージ!!」

このままじゃ埒があかないと思ったシルビアは、チルノに声をかける。

チルノも同じことを考えていた為、二人はすぐに行動に移した。チルノは剣を？に振り、叫ぶ。すると背中に薄い氷の羽が出てくる。

シルビアはあるカードを懐からだし、叫ぶ。すると水が纏った槍が出てくる。

「先行くよ!」

チルノがそう言うと、チルノの剣、バスタードチルノソードから当たり剣以外の剣が敵に向かっていく。

「奥義!!」

そして、自分で作った氷の足場で移動しながら剣を構える。

「氷華？咲!!」  
ひょうかがきゅうさい

足場から跳び、剣を振り下ろす。

この場にいた誰もがこの攻撃は通ったと思っていた。だが、現実  
は違う。

「『な!!?』」

モンスターはチルノの攻撃を受けてもびくともしていなかった。それでも、ほんの少し体に跡がついていた。そう、ほんの少しだけなのだ。

チルノの奥義でもダメージをあまり負わせる事ができなかった。

「っ！ 姉さん、どいて！！」

このままではまずいと感じたのか、シルビアは大声を上げてチルノに引くよう言った。

チルノはその言葉に従い、モンスターを蹴って離れる。

それと同時にシルビアが槍を持ち直し走る。

相手は特に動く様子もなく、シルビアの攻撃は簡単に通った。今まで通らなかったのが嘘みたい、シルビアの槍は敵の体をいとも簡単に貫いた。

槍は貫通する事無く敵の体の内部でピタッと止まる。

そして、モンスターを方から何かが解除されたような音になる。

それと同時に、モンスターは白く光り始める。

「しまっ……！」

「！ シルビア！」

「お、おい！ 文！」

シルビアはその事にいち早く気づき、槍を抜いてモンスターから離れようとするが、槍はピクリとも動かない。

文はシルビアを助けようとし、モンスターとシルビアに近づく。

文の足は幻想郷最速。だが、動くのが少しだけ遅かった。

シルビアの下に付き、手をとったはいいが、逃げる暇もなく、文も白い光に包み込まれた。

チルノとレイセンも駆け寄ろうとしていたが間に合わず、鋭い光に目を閉じるしかなかった。

光が消え始め、漸く目があけられる頃になった時、モンスターは消えていた。

そしてそこには、シルビアと文の二人の姿は、見えなかった。



「ん……（つめ、たい……？）っ！！」

シルビアは、体を冷やす何かで目を覚ました。

目を開けると、どうやら路地裏のようで、道は狭く、自分が冷たいと感じたのは雨だという事を知った。

だが、シルビアは戦闘中に敵の攻撃に巻き込まれた筈なのだ。何処かのベットならまだしも、外、しかも路地裏にいることなんて絶対にありえない。

しかも、隣には自分と同じ髪色をした小さな女の子が寝ていた。なにか小さなコートのような物に包まって、しかし寒さを防げていないのか小さく震えていた。

このままでは凍えてしまうだろうと思ったシルビアは、何時も持っている鞆から暖かい物を出そうとした。

だが、手を伸ばした先には何もなかった。

「……え……」

腰に何時もつけている鞆がないことに気づいたシルビアは、バツと自分の手を伸ばした先を見る。

そこには何もなく、あったのは小さくなっていた自分の手だけだった。

「嘘……」

シルビアは一度、自分の体を見た。

着ていた服は小さく、白いＴシャツと紺色の短パンという何時もとは全く違う服。足は裸足で、小さくなっていた。地面は、何時も

より近くなった。

でも、水溜りに映る顔は、全く一緒だった。  
この事実が、シルビアにとっては受け入れられなかった。

『……さん……シルビアさん、聞こえますか？』  
「っー！」

その時、突然声が聞こえた。  
シルビアは驚き、警戒しながら周りを見渡す。

『聞こえてますね。よかった』  
「……もしかして、神様？」

また声が聞こえた。

周りを見てもいない限り、この声は頭に直接聞こえているのだろうと思ったシルビアは、こんな事が出来るであろう人物？の名を言う。

『はい、あつてます。あと、私の声は貴方にしか聞こえませんが、心で思ってくださいればこちらも分かります。そして、早速ですが本題に入ってもよろしいでしょうか』

『……ええ、いいわ』  
『ではまず謝罪から。すみませんでした』

本題に入って早々謝られたシルビアは、困ってしまった。どうして自分が謝られたのか想像がつかないからだ。

『本来ならば元の姿、服装で二人とも同じ指定された場所に轉移させていただく予定でした。そして数年間こちらで修行してもらい、事態の対処に向かってもらう筈だったのです』

『筈だった？』

『ええ。貴方方が最後に行った依頼の時のモンスターですが、そのモンスターに強制転移されてしまったようです』

『……』

『何とか途中で転移権を奪い取ることに成功しましたが、あなた方hもとの姿ではなく、子供の姿になってしまったのです』

『……だったら、どうして私はこの服を着ているの？ 普通だったら服はそのまま転移するはずじゃ……』

『っ……それは……』

シルビアの疑問に、神様は口ごもってしまう。  
が、数条もすると、思い口調で話し始めた。

『……そこには本来、違う人間がいたんです。名前は美空といいました。その子は元々体が弱かったらしく、親に雨の中捨てられ、妹に自分のコートを着せ、凍え死んでしまいました。ほんの、数分前に……』

『なんですって!？』

『そして、私達神は、死んだ人になぜ自分は死んだのか説明しなくてはなりません。その時私は貴方の転移先で悩んでみから、表情に出てしまったのでしよう。その子供にこういわれました。【何を悩んでいるの?】と』

『……』

『その時、私はつい話してしまったのです。それを聞いたその子は、じゃあ私の位置を使つてよと、軽々しく言いました。本当にその意味が分かっているのかを聞くと、その子は嬉しそうにいました。

【私には妹がいるの。その妹は正直暗くてさ、誰かが傍にいないと駄目だと思うんだよね。だからさ、神様が悩むほどその人はいいい人なんでしょ? だったら、私の変わりに、ううん。代わりじゃなくても妹を愛してくれるかもしれないじゃん。だからさ。私の場所、

使つてよ】つて、言つて、くれたんです……！これじゃあ……神様、失格ですよね……』

神様は泣きながら話した。悔しそうに話してくれた。

シルビアの頬には、涙が流れていた。

あつた事の無い自分を信じてくれた少女、あつた事のない自分に妹を頼んだ少女。

その全てが、シルビアにはまぶしく思えた。

『その子さ……本当に子供？ 私よりいい子じゃない』

『そうですね……私も、そう思います』

『……………この子の名前は？』

『え？』

『だから、頼まれたからには育てないと駄目でしょ？ その子の変わりは出来ないけどね』

『……………はい！！』

シルビアは神に自分の妹になる少女の名前を聞いた。

神は嬉しそうにその子の名前を教えてくれた。

シルビアは名前を聞いた後、とりあえずこの路地裏からでようと考え、自分の妹、簪を背負った。

シルビアが簪を背負い路地裏を歩いて数分。漸くシルビアは路地裏から出れた。

だが、シルビアの体力はもう限界であつた。

子供の体になり、体力も力も減ってしまった。しかも今背負っている簪とも、あまり身長が違わなかったため、余計体力を奪って行く。

足は裸足のまま歩いていて、赤くなっており、見られない状態にな

っていた。

シルビアは自分の視界が霞んでも、止まらなかった。止まったら倒れてしまうのが分かっていたからだろうか。

その時、シルビアの前に人影が出来た。

その人は、シルビア達よりも薄い水色の髪をロングヘアしていて、薄赤い瞳を持っていた。

「……誰よ、あんた」

「大丈夫？ 貴方達、びしょ濡れじゃない。それに足も……」

女性はシルビアの質問を無視して、逆に訪ねてきた。そして、手を伸ばしてくる。

本来、シルビアは人を見る目があるのだが、体力もなくなっていた為、思考力が低下していた。だからか、シルビアは心配してくれた女性の手を避け、また歩み続けた。

だがとうとう体力が付きてしまい、倒れてしまった。

（あゝ、本気でやばいかも……）

「あゝもう！ ……た……ちよっ……」

最後に聞こえたのは、さっき自分達を心配した女性の声だった。

## 第一話 依頼（後書き）

2 作品目になります。

前のはいろいろと変になってしまったのでしました削除しました。  
読んでくださった方、こちらの勝手な都合で申し訳ございません。

## 第二話 更識楯無（前書き）

ようやく第二話の投稿です  
一話と違い、とても短いです

## 第二話 更識楯無

ある畳が何畳も敷き詰められた部屋に、シルビアと簪、そしてシルビアたちを心配した女性はいた。

シルビアの足には包帯が巻かれており、簪は外にいた時の様に凍えた様子はなかった。

女性は二人の頭をなでながら、親が子に見せるような顔で微笑んでいた。

もし、シルビアたちの関係を知らなければ、それは微笑ましい親子の風景に見えただろう。

そして女性が二人の頭をなで続けて数分後、シルビアは目覚めた。

「ん……うん……？」

「あら、起きた？」

「……………っっ！！」

「だーめ。まだ寝てなさい」

シルビアは寝惚けているのか、女性の存在に気づいてはなかった。しかし、女性が声をかけて数秒もすると女性の存在に気づき、慌てて起きようとする。だが、女性は起きようとしたシルビアの肩に優しく手を乗せ、また寝かした。

「あ、あの、ここは……？」

「ん？ ああ、ここは私の家よ」

「そう、ですか……」

シルビアが女性に問い、女性が答える。これで会話が一応成り立ったが、それも一度だけで、その後は話すこともなく沈黙が流れた。シルビアはこの沈黙が嫌で何か話すことはないかと頭で色々と考



えていると、隣で寝ていた簪が目を覚ました。

「む、ううん……」

「か、簪!？」

「おねえ……ちゃん……?」

「えと、その、だ、大丈夫?」

「うん……」

「そ、そっかあ。あ、寒くない?」

シルビアはすばやくもう一度起き上がり、簪の近くに行く。足に包帯が巻いてあり少し動きにくかったが、そんな物お構い無しにと簪に近づいた。

シルビアは、簪の近くに行った後すぐに、どんどんと何処か悪いところはないか聞いた。

シルビア。転移し、さらに幼児化した後すぐに一人の人間の姉になった妖精。自分が元々妹な為、正義の見方で姉のチルノや園で世話になった上白沢慧音先生、森羅で世話になったレティ、喫茶店? 7番街中央通り上海喫茶天国? 略して? 中国? の店主、紅美鈴。その他もろもろと姉的存在がいた為、妹との接し方にはそこまで困ってはいなかった。それでも、初めての妹という事でとても心配性になっていたが。

何回か質問をし、落ち着いてきた所でシルビアと簪はずっと傍にいた女性に向き直る。

「あ、ありがとうございます。その……助けてもらったし、妹を温めてくれたりしてくれて」

「いえいえ、どういたしまして。私は更識楯無っていうの。よろしくね、美空ちゃん、簪ちゃん」

「え!?!ど、どうして私の名前を……」

女性、更識楯無はなぜかシルビアが変わる前の女の子の名前を叫んでいた。

簪の名前はシルビアが呼んだ為知っていても不思議ではないが、美空という名前はまだ一回も言っていない為、楯無は知らない筈なのだ。だが、楯無は知っていた。

「まあまあ、そんな事置いといて」

「そんな事って……」

楯無のその台詞にシルビアは苦笑いをした。

そんな時、笑っていた楯無の顔が急に真剣な顔になる。

それを見たシルビアは背筋を伸ばして姿勢を直した。

「そんなに改まらなくてもいいんだけど……本題に入るけど、いいかしら？」

「は、はい」

シルビアは緊張し背筋を伸ばしたまま、次にどんな言葉がくうのか待った。が、いつまで経っても楯無から言葉は聞こえなかった。その楯無本人は、目を左右に動かしたり、人差し指で頬をかいいたりして、落ち着いていない様子だった。

「あ、あの……」

「へー？ ご、ごめんなさい。その、えっと、わ、私たちの子供になってくれないかしら！？」

「「え」「」

シルビアと簪は一度互いに顔を見合わせた後、もう一度楯無の方を向き

「ええ!!?」

叫んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4959y/>

---

正義の味方の妹は生徒会長

2011年11月30日19時46分発行